第❶日　え・か・が・聞こえ・けれ・こそ

解答

① a＝2　b＝3　c＝1　d＝4
② a＝3　b＝1　c＝2　d＝1
③ a＝5　b＝2　c＝4　d＝1
　e＝6　f＝3
④ a＝3　b＝2　c＝1
⑤ a＝6　b＝6　c＝3　d＝2
　e＝4　f＝5　g＝1
⑥ a＝2　b＝1

発展演習1　イ

発展演習2　エ

解説

最初に、識別関係のすべての項目に当てはまる注意をしておきたい。

本書に取りかかる前にある程度訓練ができていて、見た瞬間に分かるような人は、そのまま進んでよい。

しかし、あまり自信のない人は、まず傍線部の前後をきちんと単語分けして、自立語かあるいは付属語か、一単語かあるいは語の一部か、などを見きわめながら丹念に詰めていこう。そうしないと、いざという時に使える知識として定着しないからだ。

① さて、「え」の中で、4の「え」（終止形は「ゆ」）は上代の助動詞なので、文法問題以外にはあまり出てこないものである。中古以降は、「る」が同じ意味を受け持つようになり消滅する。

② 「か」（後出「や」も同様）については、疑問か反語かの区別は大切なので、どちらの意味がふさわしいか、常に考えること。

dの「か」は、文末用法の例である。文として完結したかたちの後に付いているところが、結びの省略の場合と異なる。次の二つを見比べてほしい。

1　童べと腹立ち給へるか。（源氏）

2　何人の住むにか。（源氏）

（だれが住んでいるのだろうか。）

前者は、「童べと腹立ち給へる」でも文が完結するので、「か」は文末用法。

後者は、「何人の住むに」では文が宙ぶらりんなので「か」は係助詞で、結び「あらむ」の省略。

③「**が**」は、まず格助詞か接続助詞かをしっかり見きわめることが大切だ。原則は、次のとおり。

・体言に接続　→**格助詞**

・連体形に接続→**接続助詞**

（ただし、連体形の下に体言を補って口語訳できるものは格助詞）

④「**聞こえ**」は、特に問題ないだろう。

⑤「**けれ**」では、1の過去の助動詞「けれ」を除けば、他はすべて語の一部である。単語分けさえふつうにできれば、まぎれるものはない。

なお、gは本冊の分類では1の過去の助動詞になるが、この例文での詳しい意味は詠嘆である。

⑥「**こそ**」は二種類しかないので、係り結びをチェックしても区別できるはず。

口語訳

① 私が思うとおりに、どうしてそらで覚えていて話してくれようか。

・（亡き子を）忘れきれず、残念なことが多いが、述べ尽くすことはできない。

・男は、この女をぜひ妻にしようと思う。

・真珠はそのすぐれた価値を人に知られない。しかし知られなくてもかまわない

② 白露を真珠のように貫き通して見せている春の柳よ

・どの山がいちばん天に近いか。

・あとまで見ている人がいるとは、どうして知ろうか、いや知りはしないだろう。

・子どもたちとけんかでもなさったのか。

③ みごとに書いていますが、難点が少々ございます。

・雀の子を犬君（＝人名）が逃がしてしまったの。

・娘が二人いたが、姉は人妻であった。

・妙観（＝名工の名）の刀は、それほど鋭くない。

・この世の中に死別などなければよいのになあ

・どうして……兼久の（歌）はまずいのであろうか。

④ もったいないご庇護を頼りにし申し上げながらも

・ここは、昔、名高く評判になっていた所である。

・天下の名人でも、初めは未熟だという評判もあり

⑤ 財宝が多いと、一身を守ることが不十分になる。

・野分の明くる朝は、まことに趣がある。

・薄情な人の縁続きだから、愛しとげられそうもない。

・自分の主君の申しつけをかなえようと思うのは当然である。

・見に行きたいが、全然道も覚えていない。

・忘れ貝を寄せて来て置いていってくれ、沖の白波よ

・このように燃えるのだなあと、わかったのである。

⑥「北隣さん、聞いていらっしゃるか。」

・季節の移り変わることこそ、何事につけても興趣が深い。

発展演習 1

建保のころ、御所にお仕えする女房の夢に、冠を付けた者が大勢参って、「（この御所に）剣璽をお入れ申し上げるはずだから、皆それぞれ用意なさってください」と言うと見たので、たいそう不思議に思われて、宮（＝守貞親王）にお話し申し上げたが、宮は「どうしてそのようなことがあろうか」と、（皇位のことなど）お考えにもならず、とうとう剃髪までなさって……

発展演習 2

山里は、（四季の中では）秋がとりわけ心細く感じられる。鹿の鳴く声で夜中に幾度も目を覚ましているよ。